

光触媒研究会

1. はじめに

本研究会の遠祖は、研究会制度が開始された翌年の1988年から始まる「エレクトロキヤタリシス研究会」である。1994年には、その後継研究会として「電子または光子がかかわる触媒研究会」が発足した。触媒反応のドライビングフォースとして外場を作用させるということを強調して命名されたものと思われる。「光触媒研究会」は、さらにその後継研究会として2004年に引き継がれたものである。また、当研究会発足のもう一つのきっかけは「光がかかわる触媒化学シンポジウム」の開催である。同シンポジウムは「光がかかわる触媒化学の小討論会（触媒学会主催、1979-81年）」として始まり第1～3回「太陽光エネルギー変換にかかわる触媒化学シンポジウム（理研、1982-84年）」を経て1985年から現在のタイトルに至っている。連綿と続くこの研究分野に新しい風を吹き込んできた日本の触媒学会を中心とする研究者の当該分野への貢献は極めて大きい。可視光水分解をはじめとしたこの研究分野においては、日本が世界をリードしている。

2. 今年度の活動内容と展望

今年度も、「光がかかわる触媒化学シンポジウム」（第37回）を7月6日、近畿大学にて開催した。また、例年どおり触媒討論会へのセッション参加の事業を展開した。

シンポジウムは、今後の研究の方向性を示す特別講演（1件）、研究成果を総括的に示す総合講演（2件）、最新の研究成果を示す一般講演（9件）、学生によるポスター発表（27件）で構成された。本シンポジウムでは、様々なステージにある研究を合わせて拝聴することができるため大変勉強になる。ポスターセッションでは、とくに、学生と若手研究者との間で活発な討論が行われ、8名にポスター賞を授与した。昨年に引き続き関西での開催であったため、発表件数が若干減少したが、タイトなプログラムから解放された。当日は梅雨前線の影響による大雨も関わらず、参加者は79名に達した。

北海道教育大学函館校で行われた第122回触媒討論会に光触媒セッションとして企画し、口頭A2、口頭A1、ポスターの発表件数はそれぞれ6件、56件、28件であった。これは、2011年度から引き続き各セッション中でもっとも多い発表件数であった。特別講演として、三澤弘明先生（北海道大）に「局在プラズモン共鳴を用いた光エネルギー変換システムの構築」を、依頼講演として、久富隆史先生（信州大）に「太陽光水分解反応を目的とした粉末半導体光触媒の開発」をお願いした。また、岩瀬頭秀先生（東京理大）の学術奨励賞受賞講演「還元型酸化グラフェンと光触媒を組み合わせた人工光合成系の開発」もセッションの間に入れていただいた。いずれの講演も盛況であった。

3. 世話人代表

古南 博

〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1 近畿大学理工学部応用化学科

E-mail: hiro@apch.kindai.ac.jp TEL: 06-4307-3452

光触媒研究会HP: <http://www.shokubai.org/com/photo/>